

報告

令和7年度「京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～」結果について

令和7年10月7日
学校教育課

児童生徒一人一人の学力の伸びや非認知能力の変容を確かめられる京都府独自の調査を実施

- 1 調査名称 京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～
- 2 調査目的 児童生徒の伸びや変容から、指導のポイント・課題を把握し、より効果的な指導を実現
- 3 調査対象 府内公立小・中・義務教育学校及び特別支援学校の小学校第4学年～中学校第3学年
(京都市除く)

【令和7年度受検者数(人)】

	小学校 第4学年	小学校 第5学年	小学校 第6学年	中学校 第1学年	中学校 第2学年	中学校 第3学年
国語	8,672	8,915	8,899	8,518	8,545	8,579
算数・数学	8,671	8,926	8,900	8,520	8,550	8,588
英語					8,549	8,589
実施校数	194	194	193	96	97	98

- 4 実施時期 令和7年5月19日(月)～ 5月23日(金) 小学校
5月26日(月)～ 5月30日(金) 中学校
- 5 調査内容 教科に関する調査 小学校第4学年～第6学年：国語、算数
中学校第1学年：国語、数学(算数)
中学校第2、第3学年：国語、数学、英語
質問調査 生活状況、非認知能力、学習への取り組み方等、ICT利活用に関連する調査
- 6 調査の特徴＜IRT×CBT方式＞ 全府実施は全国初
 - (1) 教科に関する調査及び項目反応理論【IRT (Item Response Theory)】を用いた学力の推定
 - 異なる調査でも、調査結果を直接比較することができるIRTを用いることで、学力の伸びを確かめることが可能となる。
 - *上記のためには、「過去問題」の利用が必要であるため、出題問題は非公表
 - (2) 非認知能力や学習への取り組み方等を確かめられる質問調査
 - 京都府教育振興プランに示す3つのはぐくみたい力*、学習への取り組み方等について、複数の質問項目を組み合わせることで測定
 - (*「主体的に学び考える力」、「多様な人とつながる力」、「新たな価値を生み出す力」)
 - (3) 調査方法 1人1台端末で出題及び解(回)答【CBT (Computer Based Testing)】

1 結果の概要

(1) 学力の状況

○令和7年度の各教科、各学年の府平均学力ステップ

国語

		小学校4年生	小学校5年生	小学校6年生	中学校1年生	中学校2年生	中学校3年生
高 ↑ 学 力 ↓ 低	ステップ12						
	ステップ11						
	ステップ10						
	ステップ9						
	ステップ8						
	ステップ7						
	ステップ6						
	ステップ5						
	ステップ4						
	ステップ3						
	ステップ2						
	ステップ1						

	府平均
	測定範囲外

算数・数学

		小学校4年生	小学校5年生	小学校6年生	中学校1年生	中学校2年生	中学校3年生
高 ↑ 学 力 ↓ 低	ステップ12						
	ステップ11						
	ステップ10						
	ステップ9						
	ステップ8						
	ステップ7						
	ステップ6						
	ステップ5						
	ステップ4						
	ステップ3						
	ステップ2						
	ステップ1						

英語

		中学校2年生	中学校3年生
高 ↑ 学 力 ↓ 低	ステップ12		
	ステップ11		
	ステップ10		
	ステップ9		
	ステップ8		
	ステップ7		
	ステップ6		
	ステップ5		
	ステップ4		
	ステップ3		
	ステップ2		
	ステップ1		

※各学年の学力のステップは下記の範囲内【36段階（12ステップ×3層*）】で設定

小学校 第4学年	小学校 第5学年	小学校 第6学年	中学校 第1学年	中学校 第2学年	中学校 第3学年
1-C～7-A	2-C～8-A	3-C～9-A	4-C～10-A	5-C～11-A	6-C～12-A

※各ステップの中で学力の高い順からA、B、C

(2) 学カステップの変化

○昨年度の調査から学カステップが上がった児童生徒の割合(%)

	小学校 第5学年	小学校 第6学年	中学校 第1学年	中学校 第2学年	中学校 第3学年
国語	75.9	65.6	71.0	56.6	62.0
算数・数学	72.2	65.5	76.0	63.4	66.5
英語					69.7

*教科に関する調査及び項目反応理論【IRT (Item Response Theory)】を用いた学力値の推定による「学カステップが上がる」ためには、次の3つの条件をすべて満たすことが必要

- ①調査の前年度に学んだ内容の問題が解けること
- ②調査の前々年度までに学んだ内容の問題も解けること
- ③前年度の調査に比べて難易度の高い問題が解けること

○同一学年の学カステップの推移

○国語

学 年	小4時	小5時	小6時	中1時	中2時	中3時
現中3				令5 8-C	令6 8-B	令7 8-A
現中2			令5 7-A	令6 8-C	令7 8-B	
現中1		令5 7-C	令6 7-A	令7 8-C		
現小6	令5 6-C	令6 7-C	令7 7-B			
現小5	令6 6-C	令7 6-A				
現小4	令7 5-A					

○算数・数学

学 年	小4時	小5時	小6時	中1時	中2時	中3時
現中3				令5 7-A	令6 8-C	令7 8-B
現中2			令5 7-C	令6 7-A	令7 8-C	
現中1		令5 6-B	令6 6-A	令7 7-B		
現小6	令5 6-C	令6 6-B	令7 6-A			
現小5	令6 5-A	令7 6-B				
現小4	令7 5-B					

○英語

学 年	中2時	中3時
現中3	令6 9-B	令7 10-C
現中2	令7 9-B	
現中1		
現小6		
現小5		
現小4		

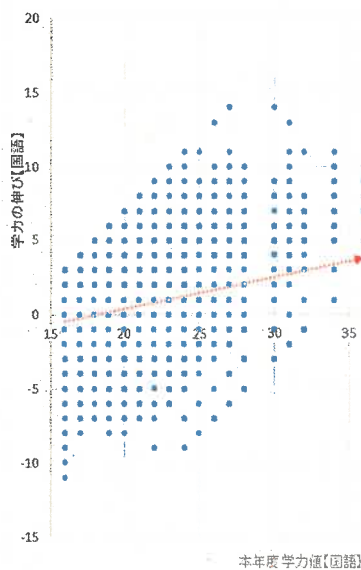
昨年度の調査から学カステップが上がった児童生徒は、中学校第2学年国語を除いて、小学校第5学年から中学校第3学年において、国語及び算数・数学において 65～76%程度であった。中学第2学年国語は 56.6%伸び率であった。

また、同一学年の学カステップの推移を見ると、現学年としては、全ての学年・教科で昨年度から学カステップが上がった。

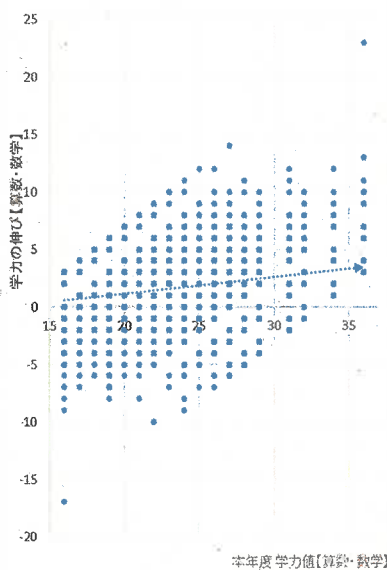
(3) 「学力値の伸び」と「学力値」との関係

各教科における「学力値の伸び」と「学力値」との相関係数を算出し、散布図で示した。

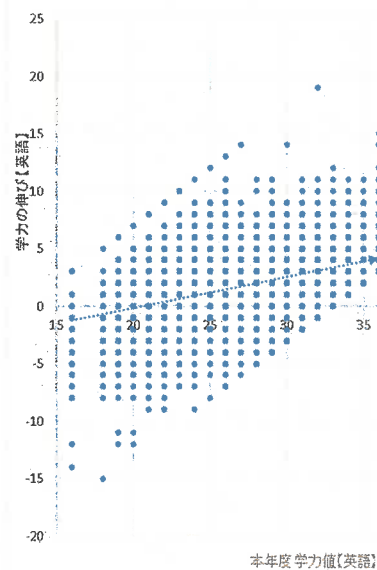
中3 国語



中3 算数・数学



中3 英語



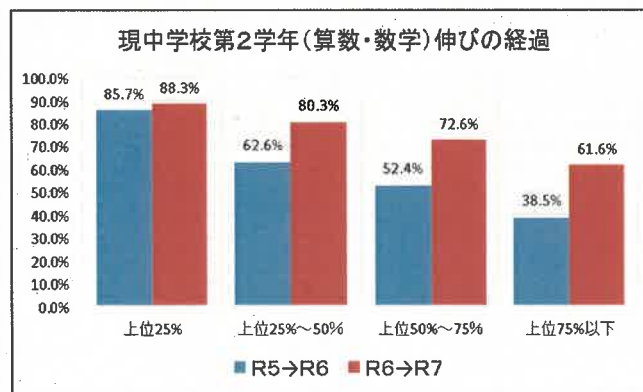
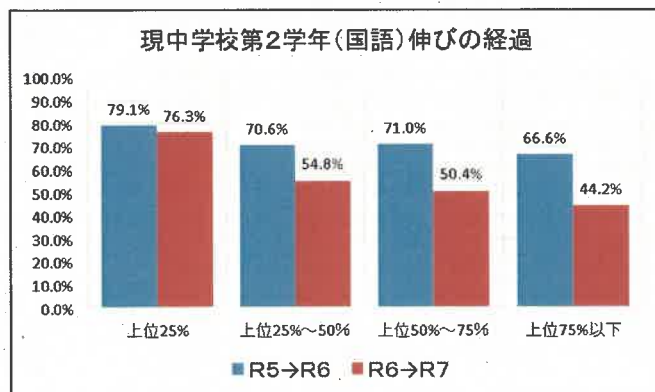
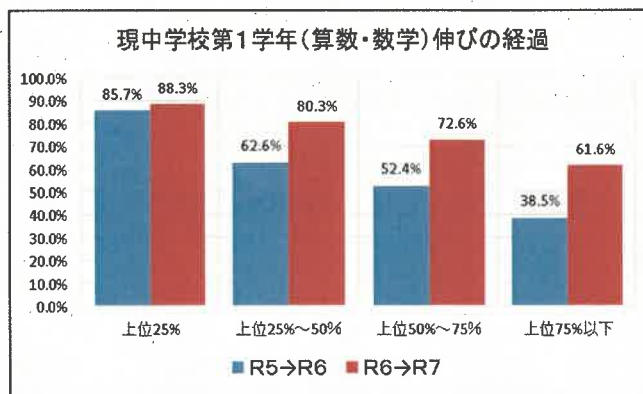
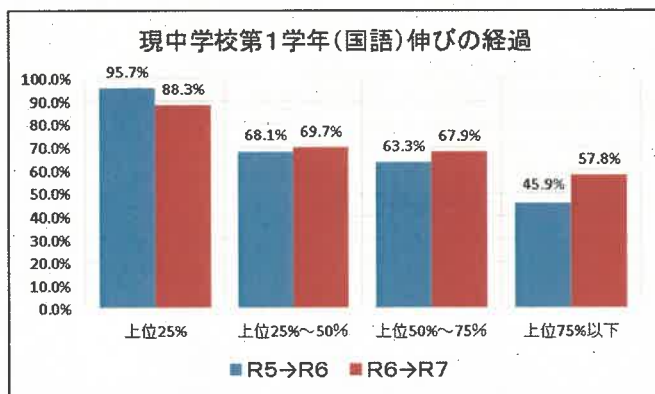
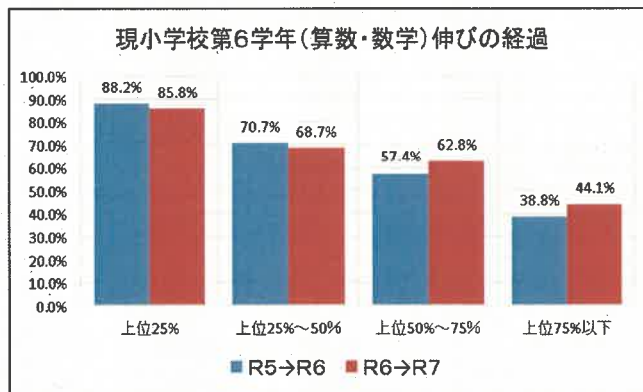
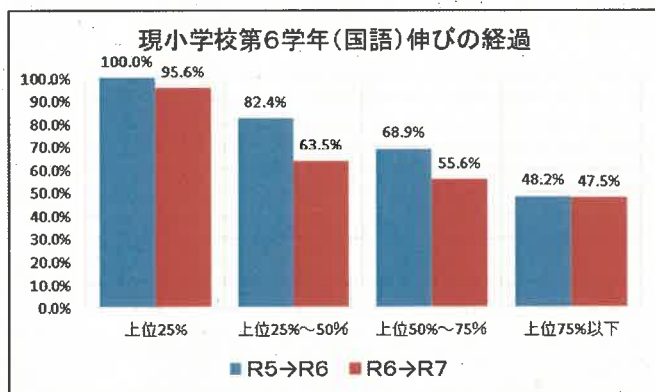
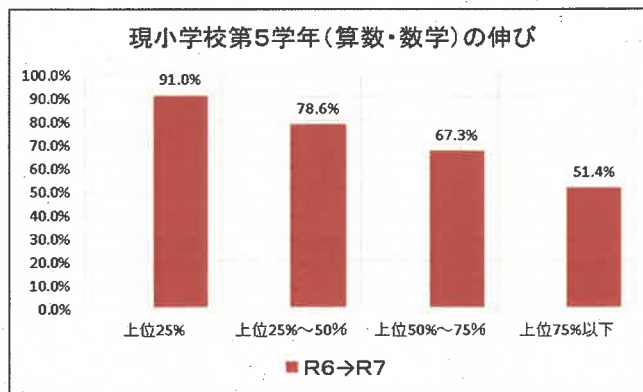
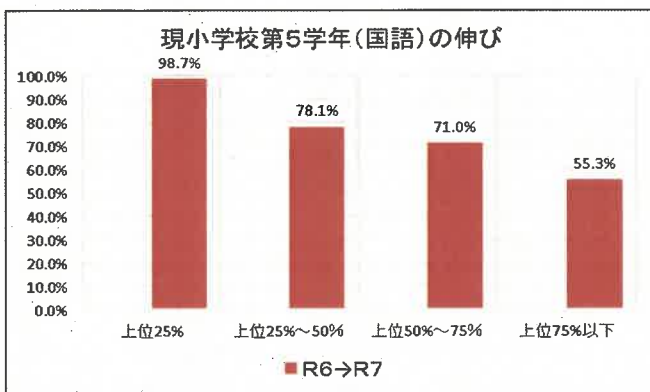
* 点は児童生徒一人一人の結果データを示す。ただし、複数名が重なる場合がある。

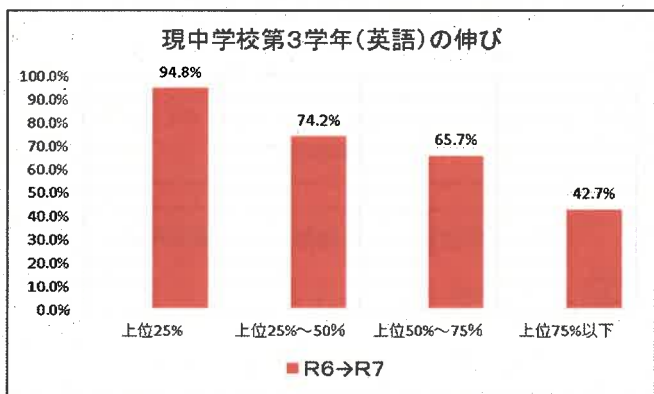
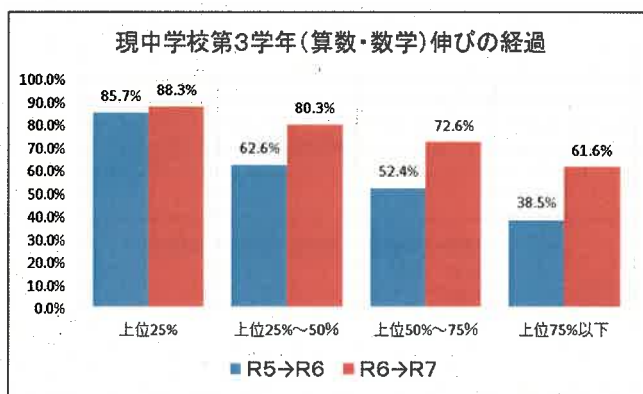
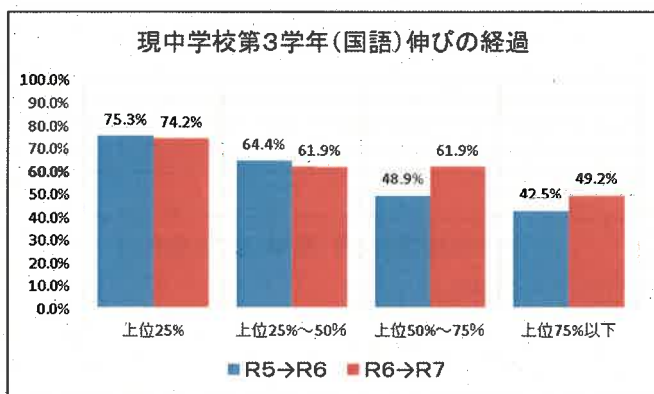
「学力値の伸び」については、対象教科の「学力値」との正の相関が見られた。「学力値」が高い児童生徒ほど「学力値の伸び」がある傾向にあった。

なお、「学力値の伸び」と、「非認知能力」や「学習方法」、その他の質問調査項目との相関関係はほとんど見られなかったため、さらにデータを収集及び分析をし、明らかにしていきたい。

(4) 学カステップの層分布における伸びの状況

今年度の調査結果の学カステップを上位から25%ずつの層に分類し、各層における昨年度からの学カステップの上昇率を算出した。





伸びの傾向については、全ての教科、学年において上位層の方が伸びやすい傾向にあった。

国語については、小学校第6学年と中学校第2学年において、中位層が昨年度より伸び率が下がっている。

算数・数学については、中学校第1学年～第3学年において、中位層と下位層が昨年度より大きく伸びている。

英語については、中位層の伸びと下位層の伸びに大きな差がある。

(5) 学力値と非認知能力等との関係性

ア 教科に関する調査結果と質問調査結果との相関係数を算出し、特徴的な項目との関係性を図式化した。

数字は相関係数を示す

マイナス表記は負の相関係数を示す

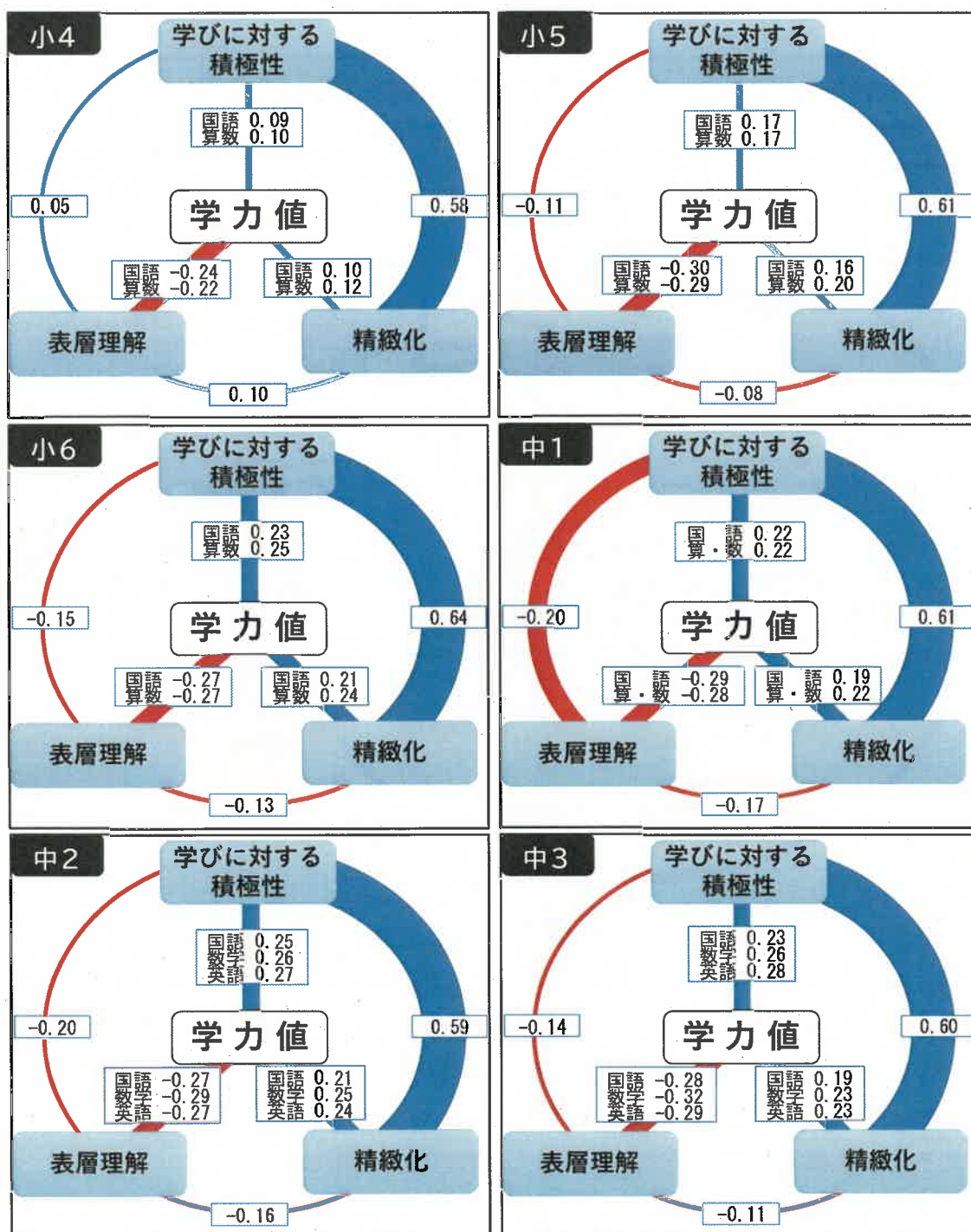
±0.2 以上細線（弱い相関）

±0.4 以上太線（強い相関）

学びに対する積極性：学びを広げたり深めたりするために自ら積極的に調べたり学んだりしようとする姿勢

精緻化：意味も含めて統合的な理解

表層理解：正解さえ分かればよいという理解

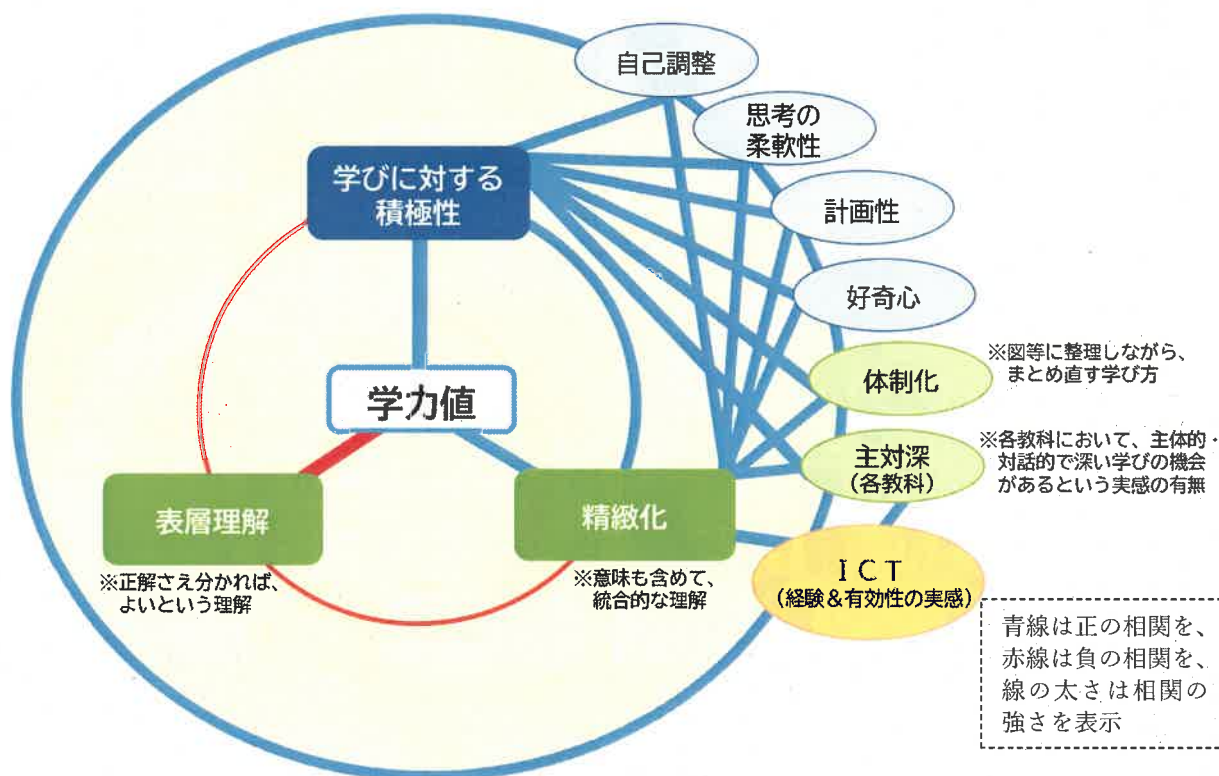


教科に関する調査結果と「学びに対する積極性」及び「精緻化」との間には正の相関関係があり、その大きさは、学年が上がるにつれてやや高くなる傾向がみられた。

一方、教科に関する調査結果と「表層理解」との間には負の相関関係がみられた。

学力ステップが高い児童生徒ほど、自ら積極的に調べたり学んだりしようとする質問や、学んだことを関連付けたり、活用したりする学習経験についての質問に対して、肯定的に回答していることが分かった。

イ 教科に関する調査結果と質問調査結果との相関係数を算出し、先の図に「学びに対する積極性」と「精緻化」に共通して関連する質問項目の関係性を追加した。

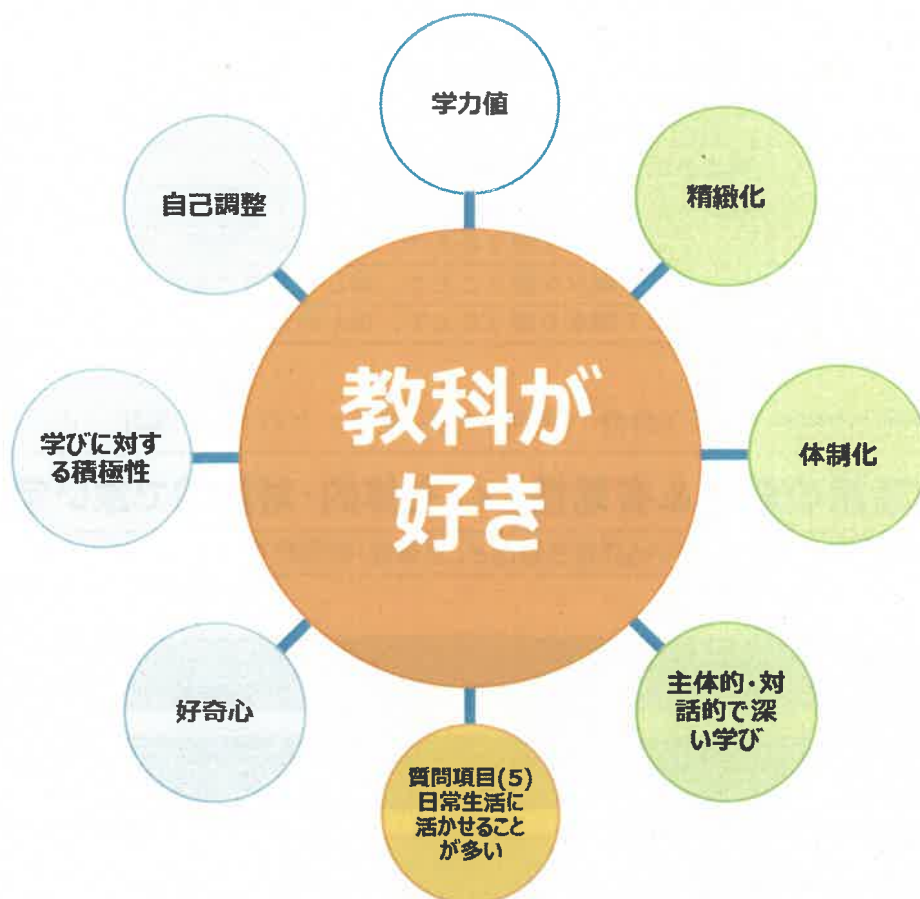


「学びに対する積極性」及び「精緻化」は他の非認知能力や学習方法等との関連性も高い。とりわけ、非認知能力の「自己調整」「好奇心」「思考の柔軟性」「計画性」や、図等に整理しながらまとめ直す学び方の「体制化」と、各教科において「主体的・対話的で深い学び」の機会があるという実感の項目において、正の相関の高さが見られた。

「主体的・対話的で深い学び」の項目においては、ICTの活用経験の多さと有効性をどちらも実感している児童生徒ほど、肯定的に回答している。

(6) 「教科が好き」と学力値、質問調査結果との関連性

「教科が好き」の質問項目と調査結果との相関係数を算出し、特徴的な項目との関係を図式化した。



「教科が好き」について、肯定的な回答をしている児童生徒ほど、「学力値」が高くなる傾向が見られた。

また、「教科が好き」と、肯定的な回答をしている児童生徒ほど、非認知能力の「自己調整」「学びに対する積極性」「好奇心」、学習方法の「体制化」「精緻化」「主体的・対話的で深い学び」について肯定的に回答しており、正の相関関係が見られた。さらに、「授業で学んだことは、身の回りの出来事や日常生活に活かせることが多い。」との正の相関関係も見られた。

「教科が好き」と教科において「主体的・対話的で深い学び」の機会があるという実感の項目においても、相関関係が強い傾向にあった。

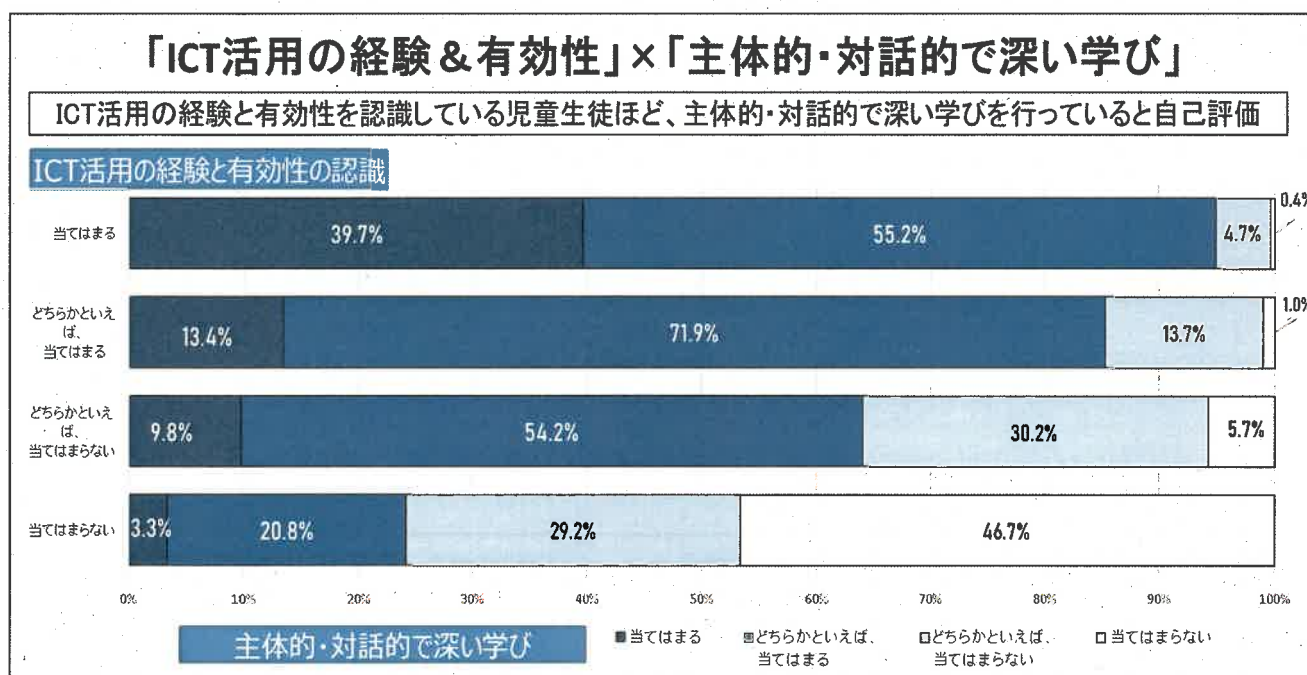
(7) 「ICT 活用の経験と有効性」について

ICT に関する調査結果と学力値及び質問調査結果との相関関係を算出し、特徴的な項目間でクロス集計した。

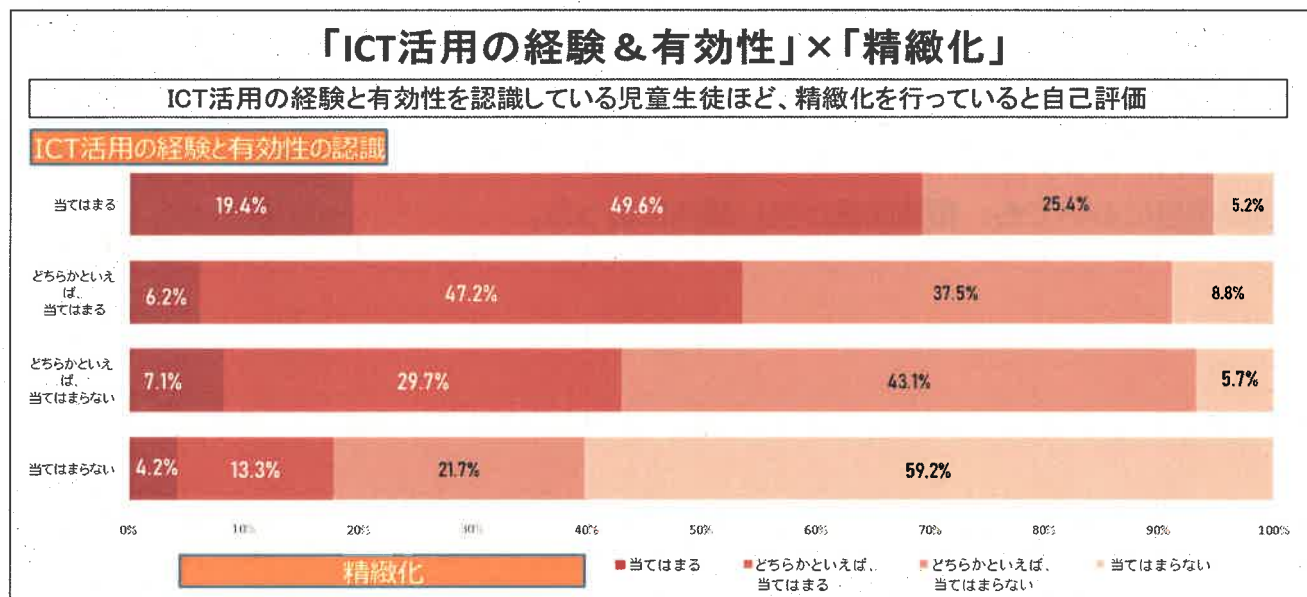
・ ICT に関する質問項目

経験の確認	授業で、I C T 端末を使って学習する機会がある。
	家で、I C T 端末を使って学習する機会がある。
有効性の確認	学習するときに、I C T 端末を使うことで、これまでの学習のふり返りがしやすい。
	学習するときに、I C T 端末を使うことで、学習内容が理解しやすくなる。
	学習するときに、I C T 端末を使うことで、楽しく学習できる。
	学習するときに、I C T 端末を使うことで、ほかの人と意見や考えを共有しやすい。

・ 「ICT 活用の経験と有効性」と「主体的・対話的で深い学び」とのクロス集計



・ 「ICT 活用の経験と有効性」と「精緻化」とのクロス集計



I C Tの活用経験や頻度の多さと有効性のどちらも実感している児童生徒ほど、非認知能力の「自己調整」「学びに対する積極性」「好奇心」「思考の柔軟性」や学習方法の「精緻化」「主体的・対話的で深い学び」への肯定的に回答している傾向があり、正の相関関係が見られた。

特に、各教科において「主体的・対話的で深い学び」の機会があるという実感についての項目と、正の強い相関関係が全学年で見られた。

3 伸びや変容が見られる学校の共通点

(1) 検証対象

「京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～」活用推進事業研究校の実践から

(2) 共通点

ア 授業改善(内容×方法)

- ・各教科の資質・能力の育成や単元目標の達成を大切した授業
- ・習得及び活用だけでなく探究を大切にした学習過程
- ・学ぶ意義や目的意識を大切にした単元構想や授業展開
- ・子どもの非認知能力等の発揮の場を設定
- ・ICTの効果的な活用(クラウド活用も含む)
- ・全ての子どもの基礎・基本の定着を図る取組の継続

イ 教師の観察(個々の観察×教職員間の情報共有)

- ・授業、授業以外も含めて子ども一人一人の言葉や行動の観察による情報収集
- ・子どもの振り返りから個々の学びの状況を把握
- ・一面的な観察だけでなく、様々な教育データを基に子ども一人一人の心理状態の把握
- ・学びのパスポートやそれ以外のデータも活用し、定期的なデータ分析

ウ 一致した指導体制にある教職員集団(RV-PDCA サイクル×共通理解)

- ・「目指す子ども像」を背景も含めて共通理解
- ・非認知能力等の課題を共通理解し、具体的な姿として言語化
- ・全教職員でのデータと観察分析及び裏付けのある実践の展開
- ・定期的な検証と目標再設定の場を確保
- ・教職員一人一人の授業への思いと実践と検証結果の共有
- ・教科の枠に捉われない授業研究、教科の特色を生かした授業研究
- ・積極的な公開授業と振り返り

4 結果からの考察

- ・小学校第4学年から中学校第3学年にかけて、60%から70%の児童生徒が学力ステップの向上が見られたが、中学校第2学年の国語科は、60%を切る状況となった。算数・数学の中学校第2学年と第3学年は、昨年度は50%を切る状況であったが、今年度は他学年と同様の結果であった。「学力ステップが上がる」と判断する3つの条件（P3参照）のうち、②の条件に課題があったことから、長期の記憶に弱さが見られる。それぞれの学年において教科の系統性と教科横断の視点を意識した授業を展開し、そのためには、これまで学んできた知識や様々な体験と関連付けられる深い学びを実現することが求められる。
- ・教科に関する調査結果と非認知能力等の相関関係からは、過去2年間と同様に、「学びに対する積極性」と「精緻化」との関連性の高さが見られた。一方、正解さえ分かれば良いという「表層理解」については、負の相関関係が見られた。学力ステップが高い児童生徒ほど、学びを広げたり深めたりするために自ら積極的に調べたり学んだりしようとする質問や、学んだことを関連付けたり活用・発揮したりする学習経験についての質問に肯定的に回答していることが分かった。また、学力ステップが低い児童生徒ほど、解き方が分からなくても答えが合っていればよいといった項目に肯定的に回答していることも分かった。子どもが自らの意志で学ぼうとしたり、課題を解決しようとしたりする非認知能力等の発揮の場を授業場面で設定することが有効と考える。
- ・「教科の学習が好き」という質問項目と「学力値」だけでなく、非認知能力等や学習方法、「主体的・対話的で深い学び」は、正の相関関係が見られた。「教科の学習が好き」であることと、「主体的な学び」に関連があると考えられることから、児童生徒の「もっと知りたい、探究しよう」とする知的好奇心をくすぐる授業展開や教科の魅力を感じる教育課程編成の工夫が求められる。
- ・ICTの活用経験や頻度の多さと有効性のどちらも実感している児童生徒ほど、特に「主体的・対話的で深い学び」の機会があるという実感や、意味も含めて統合的な理解となる「精緻化」についての項目との正の相関関係が全学年で見られた。他者の学びや関連資料を参照するだけで終わらず、更に調べたいことや分からないことがある時に、対話や協働ができる学習機会を設定することが有効と考える。
- ・各教科の問題ごとの趣旨に基づく正答率や伸びの状況を見ると、学力ステップが高くなる問題ほど、内容の意味理解が求められる傾向がある。児童生徒がこうした意味理解を深めるためには、学習内容を文脈に沿って理解し、既習事項や他教科での学びと関連付けながら学ぶことが重要となる。このような関連付けを通じて、知識は単なる暗記にとどまらず、意味のある理解へと深化し、剥落しにくい長期記憶として定着しやすくなる。そのためには、児童生徒が学習過程において既習事項や他教科での学びを活用できるような単元構想や授業展開が求められる。さらに、教科の魅力や学ぶ意義を実感できるよう、教師の指導性を発揮することで、児童生徒がより主体的に学び、記憶の定着がより一層強化されると考える。

5 結果の活用

7月 25 日に調査結果を各学校に返却するとともに、府教育委員会主催で府内全小・中学校を対象とする研修(活用研修会)を8月及び10月の2回実施した。府内全校での結果分析や校内研修の実施、学校改善プランの策定等を促している。これらの取組により、RV-PDCA サイクルを確立させ、2学期から次年度の指導・学校運営の改善につなげる。

また、個々の児童生徒の結果については、9月8日以降に各学校において返却。調査結果を振り返る取組が進められている。

今後、府教育委員会において調査結果のさらなる分析を進め、年度末までに各学校における授業改善の参考となる「学校改善支援プラン」を策定予定である。府教育委員会においても、これらの結果を施策や指導助言の改善に活用していく。

参考資料

1 調査の概要

(1) 調査の目的

学習指導要領に示す目標や内容に照らした学習の実現状況及び児童生徒の学習環境や家庭における生活状況等の特徴や課題など、児童生徒の「認知能力の伸び」と「非認知能力の変容」を継続的に把握する。その伸びや変容に影響を与える諸要因を客観的データに基づき分析・考察し、個別最適な学びと協働的な学びを実現する教員の指導力等についての有用な情報を得ることにより指導上の課題を明らかにして、授業改善を推進し、確かな学力をはぐくむ。

(2) 調査の対象

小学校第4学年～第6学年及び中学校第1学年～第3学年、義務教育学校前期課程第4学年～第6学年及び後期課程第7学年～第9学年、特別支援学校小学部第4学年～第6学年並びに中学部第1学年～第3学年

(3) 調査の実施日

- ア 小学校第4学年～第6学年、義務教育学校前期課程第4学年～第6学年
特別支援学校小学部の第4学年～第6学年
令和7年5月19日（月）～ 5月23日（金）までの実施指定日に、各校1学年ずつ実施
- イ 中学校第1学年～第3学年、義務教育学校後期課程第7学年～第9学年
特別支援学校中学部第1学年～第3学年
令和7年5月26日（月）～ 5月30日（金）までの実施指定日に、各校1学年ずつ実施

(4) 調査の内容

ア 教科に関する調査

(ア) 出題内容

基礎的・基本的な知識や技能を問う問題と知識・技能を活用して課題を解決するための思考力・判断力・表現力等を問う問題の約30問。解答方法は、選択式及び短答式とする。

(イ) 出題範囲

- ・小学校第4学年～第6学年、義務教育学校前期課程第4学年～第6学年
前年度までの国語科、算数科の学習内容の定着状況が把握できるもの
- ・中学校第1学年及び義務教育学校後期課程第7学年
小学校修了段階までの国語科、算数科の学習内容の定着状況が把握できるもの
- ・中学校第2学年～第3学年、義務教育学校後期課程第8学年～第9学年
前年度までの国語科、数学科、外国語科（英語）の学習内容の定着状況が把握できるもの

(ロ) 時間配当

小学校第4～第6学年は1教科40分、中学校第1～第3学年は1教科45分を標準実施時間とする。

イ 児童生徒質問調査

(ア) 出題内容

生活状況に関する項目、非認知能力に関する項目、学習方法等に関する項目、ICT活用に関する項目で構成した小・中学校共通の約100問の選択式の質問（外国語（英語）に関する項目は小学校は回答しない）。

(イ) 時間配当

小学校第4～第6学年は40分程度、中学校第1～第3学年は45分程度を目途に実施。

(5) 実施方法

1人1台端末を用いた調査（CBT：Computer Based Testing）とする。

また、本調査では、問題の難易度の推定や児童生徒の学力の推定のために、IRT（項目反応理論）という統計理論を用いることで、これまでの学力調査では確認することのできなかった児童生徒個人の経年での学力の伸びを確認することができる。